

博士学位論文審査結果の概要

ふりがな	くめ まさよ
氏 名	久米 真代
学位の種類	博士（看護学）
学位記番号	博第 15 号
学位授与年月日	平成 29 年 3 月 18 日
学位論文題目	中等度・重度認知症高齢者のがん性疼痛評価尺度の開発 -信頼性・妥当性の予備的検証-
審査委員	主査 石川県立看護大学 教授 村井嘉子 副査 石川県立看護大学 教授 武山雅志 副査 石川県立看護大学 教授 小林宏光 副査 石川県立看護大学 教授 川島和代 副査 金城大学看護学部 教授 高山成子
審査結果の概要	
<p>平成 29 年 1 月 25 日に最終試験及び審査を実施した。本研究の概要と審査結果は以下の通りである。</p> <p>本研究は、中等度・重度認知症高齢者のがん性疼痛評価尺度の開発であり 3 段階で構成されている。</p> <p>第一段階は、現象から疼痛評価項目抽出のために緩和ケア病棟の熟練看護師へのインタビューを実施、その結果、看護師の認知症高齢者の疼痛緩和における観察と判断の困難、疼痛緩和の看護における観察と判断の工夫を明らかにした。加えて、がん罹患した認知症高齢者の参加観察を行うことで看護師が見逃し易い疼痛の表現方法を明らかにした。これらの研究結果は、学術雑誌に掲載されており、研究方法及び成果に対して一定の評価が与えられている。</p> <p>第二段階は、第一段階を踏まえて既存の疼痛尺度項目との照合を図り、尺度項目の抽出と項目の妥当性の検討を行った。尺度項目の妥当性は表面妥当性と内容妥当性の検討を行った。これらについて更に検討を加え、最終的に「聞く」「行動観察」「ケアへの反応」の要素で構成される 30 項目を抽出した。</p> <p>第三段階では、中等度・重度認知症高齢者を対象にがん性疼痛評価尺度（30 項目）を実際に看護師に活用を依頼し、信頼性・妥当性の予備的検証を行った。その結果、内的一貫性 $\alpha = 0.91$、評定者間信頼性 $r = 0.754$ であった。本尺度と従来の痛み尺度である APS-J との相関は $r = 0.48$ であり、このことから本尺度は APS-J に対し独自性を持つことが示された。弁別妥当性については、がん群と非がん群の測定回数に差があるため、十分な検出力が得られず有意差の検証には至らなかった。</p> <p>本研究は、中等度・重度認知症高齢者が、がん性疼痛による苦痛から解放され質の高い生活を過ごせることを目指した尺度開発である。本尺度は、認知症高齢者のがん性疼痛を“引き出す”可能性、看護師が認知症高齢者の行動の意味を探る可能性、疼痛を見逃すことによる BPSD 悪化の悪循環を断ち切る可能性、医療施設以外のケア提供者が使用できる可能性等、看護現場に有益な効果を提供するものである。</p> <p>口頭試問において、認知症高齢者の特性、がん性疼痛尺度、評価方法等について専門的知識を有していることを確認して、審査員 5 名全員が看護学博士論文として妥当であると評価した。</p> <p>審査過程では、第 5 章総括において本研究における限界と課題について再考、加筆修正を求めた。2 月 7 日再提出後、審査委員全員が修正を確認して最終試験及び本審査に合格と判断した。</p>	

